

岡村千馬太（おかわらちまた） 三郷明盛中萱出身

<岡村千馬太が活躍した時代> 1875年(明治8年)～1936年(昭和11年) 享年61歳

明治 8	明治 23	明治 24	明治 26	明治 29	明治 30	明治 44	大正 10	大正 11	大正 12	昭和 11			
できごと	三郷中萱に生れる。馬を愛した父秋太郎は「千馬太」を名づける。	豊科の南安曇高等学校を卒業。松本の弁護士滝沢友江の書生となる。	東京し、小日向台町の尚志社に入社。講義を始める。	長野師範学校に入学。浅岡校長の愛国の至誠に感化される。千馬太の遠大な志を感じた担任の小平先生から詩を贈られる。	大隈外務大臣の演説に感銘し、対外認識の普及に目覚める。	東邦協会に入会し、帝国ホテルの総会に出席する。	伊那小学校に勤務。東筑摩郡坂北尋常小学校校長や東筑摩郡山形尋常小学校校長を歴任。	「東西南北会」を設立し松本平の教育の活性化を図る。	長野県視学となるが、岡村の「東西南北会」が気分教育と誤解され、その首謀者として更迭される。	長野県視学更迭後、行政職の埴科郡長の発令を受けるが、終生教育者の信念を貫くため固辞する。	長野県視学の渡辺担平の懇請で埴科尋常小学校校長として教育界復帰。南安曇郡教育会長に選出される。	南安曇郡視学の渡辺担平の懇請で埴科尋常小学校校長として教育界復帰。南安曇郡教育会長に選出される。	横濱市立療養所で亡くなる。



「知時務持大節即師道立矣(時務を知り、大節を持すれば即ち師道立つ)」

その時代になすべき役目を知り、節を曲げずに信ずるところを通す。このことよって教師としての守り行うべき道、師道が開かれる」という意味である。岡村の座右の銘であり、岡村はこの言葉通りの人生を歩んだ。

右の書は、犬養毅が墨書し、岡村に贈ったもの。(南安曇教育会館が保管している。)



岡村千馬太と「東西南北会」

明治新政府が「学制」を發布し、全国画一的な教育が行われる中、その教育方法に疑問を持ち、児童・生徒の個性・人権を尊重する教育を行ったのが岡村である。岡村と同じ思いを持つ教師たちとともに「東西南北会」を結成した。この東西南北会は、「真の教育の立つところは優れた教師の人格とのふれあいの中で児童の人格成長が促される」という信念から、天下第一の人格者を招き、その人格に触れることによって教師自身がまず優れた人格者であるべきだという願いのもと多くの著名人を信州に呼び、直接教えを乞うことで見識を深めた。

今なおつづく「岡村忌」



松本市の城山公園には、いくつかの文学碑が並んでいる。木下尚江や浅原六朗などの碑とともに高さ2メートルほどの「岡村千馬太先生碑」がある。この碑の前で毎年6月中旬「岡村忌」として多くの人が集まり碑前祭を行ってその遺徳を偲んでいる。すでに直接教えを受けた人は存命していないが、昭和60年頃からは、碑前祭のあと岡村の遺徳を受け継ぐ先人についての記念講演も行われている。毎年碑前祭には20名が、講演会には50名を超える教職員が集まっている。この碑が建立されたのが昭和31年。これより前岡村が亡くなったのが昭和11年である。このように長い年月にわたり岡村の遺徳を偲ぶ人々が今なお集まっている。

東西南北会が信州に招いた

天下の第一人者たち

講師には後の総理大臣犬養毅や国際連盟事務次長の新渡戸稲造、作家の島崎藤村。明治・大正期の著名なジャーナリストの三宅雪嶺、渡辺三山、古島一雄。政治評論家の志賀重昂や思想家の植村正久等々、そうそうたるメンバーが名を連ねた。



【参考文献】岡村千馬太特輯号「信濃教育」(昭和11年8月号)

短編雑誌「露草」(昭和36年)「岡村千馬太先生」(昭和44年)岡村千馬太の会

「安曇野市教育会百年誌」(昭和63年)南安曇教育会

季刊「安曇野文化」第9号(平成25年)安曇野文化刊行委員会 「三郷村史」三郷村誌編纂会

【インタビュー】赤羽根嘉矩氏(「安曇野文化」第9号岡村千馬太執筆)

・曾根原孝和氏(平成28年度岡村忌・先人に学ぶ講演会講師)